

Eureka X

六年制通信 No.38 令和5年3月10日(金)号

文科省が嫌い？

少し前まで(今もかな?) あちこちで入試広報活動と称して、小学生のお子さんをお持ちの親御さんたちに話をする機会があります。君たちのことを誉めちぎりながら、勉強の仕方であるとか語彙力の大切さとか大学入試の話などもするのですが、文部科学省の悪口をしょっちゅう言う、らしいのですね、私。昔から文部省及びのちの文部科学省が嫌いなのは確かです。もちろん最近の大学入試改革で、覚えていますかね、英検や TOEIC など外部試験を導入する話があって、あちこちから批判を浴び右往左往した挙句、慌てて取り消しましたね。あれが教育を預かる省の姿かと呆れもしましたが、私はもっと前から教育行政が気に入らなかったのです。その理由を話したことはなかったのですが、実は戦後すぐ宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を勝手に改竄して教科書に乗せたことがあるのです。それが許せないのですね、私は。「雨ニモマケズ」から始まって「風ニモマケズ … 決シテ瞋ラズ イツモシヅカニワラッテキル 一日ニ玄米四合ト …」この「玄米四合」(ちゃんと「しごう」と発音できましたか?)を「玄米二合三勺」あるいは「玄米三合」と書き換えたのです。理由は、歴史の時間に習ったかもしれませんが米の配給の時代、「四合」も食べているとまずいと考えたからだそうです。さらに賢治の選んだ表記であるカタカナや漢字を勝手に変えたものまでであったそうです。当時の文部省の責任です。傲慢にもほどがあります。賢治は「イカラズ」に「瞋ラズ」の字を採用したのですから、これを勝手に「怒らず」に変えていい道理はありません。カタカナもひらがなにしたら、締まらない詩になります。「サムサノナツハオロオロアルキ」が「おろゝ」となっていたら気持ち悪いでしょ。漱石などの小説で旧字体を今の人にも読めるようにと、新字体に変えるのは、私たちは旧字体を習っていないのだから、まだわかります(舊→旧など)。しかし、詩はいけません。作者が書いたとおりに掲載し、わかりにくいところは注釈で補うのが作品にも作者にも誠実な姿勢です。

最近『英語と日本人』(ちくま新書)を読んでいて驚きました。英語の外部試験導入の話ですが、あれ最初 TOEFL に限定していたのだそうです。しかも高校の卒業資格にも使おうとしていたとのこと。TOEFL は英語圏の大学や大学院の講義についていけるかどうかを測定する高度な試験で受験費用も四万円弱と高額です。また、受験できる場所も限られています。何を考えているのかわかりませんね。

悪口はこれくらいにして、『英語と日本人』には感動的な話がたくさんあります。そのうち入江祝衛の話を紹介しましょう。お名前は「いわえ」と読みます。この人は生涯に五冊の辞書を刊行されました。英語の修業時代には埼玉の小学校(そこで教えなが

ら)から東京の銀座へ外国人に直接英語を習うため毎晩走って通いました。往復 56 キロです。フルマラソンより長い距離です。『モダン和英辞典』(1925)を作るため十年の間、毎日休まず上野図書館で英書を読み、百万を超える用例カードを作ります。計算してみると毎日三百近い用例ですね。原稿が完成して印刷用の組版中に関東大震災が起り、慌てて印刷工場に行くと、すでに焼失し、組版も活字も灰になっていた。打ちひしがれて帰宅すると夫人が庭に穴を掘り三百キロもあるカードや原稿を埋めていた。「あなたが、あんなに心血を注いで集められたものを空しく焼いてはならないと思って、みな土に埋めました」とのこと。その後は毎朝三時に起き、時間を惜しんで昼食は抜き、風呂に入るのは月に一回か二回、髪は夫人に裁縫バサミで刈ってもらった。過労で吐血が続いても、仕事の中断を恐れて医者と呼ばなかった。(本書 078-079)

キリスト教の影響でしょうが、西洋には「労働は神が与えた罰である」とする思想があります。聖書の該当箇所をわかりやすく書くと(『創世記』第三章)神はアダムに「妻の言葉に従って、食べてはならぬと命じた木の実を食べた。よって土はお前のために呪われ、お前は一生苦しんで土より食を得よ。額に汗して食を得よ」と言いました。

一方、明治以降の日本人は労働を尊いものだとしてきたと思います。入江先生と奥様のような生き方に私は感動するし、非常に崇高なものを感じます。奥様のご苦労も大変なものだったでしょう。私はこういう話を知ると自分を恥じる気持ちが湧いてきます。休むことなど一切考えなかった入江先生と先生を支えた奥様を、現代の人々は冷笑をもって見るのでしょうか。敬意をもって見るのでしょうか。

今週のおすすめ

・佐々木良 『愛するよりも愛されたい』 (万葉社)

万葉集について、「その昔日本人は和歌の前に平等であった」と言ったのは上智大学の渡部昇一先生でした。斎藤茂吉の『万葉秀歌』(上下二巻 岩波文庫)を手にとってほしいのですが、万葉集を現代の若者言葉、それも奈良弁で“超訳”した本を偶然入手したのでちょっと紹介します。確かに笑えますけど怖い気もしますし、迷います。この本を君たちに紹介していいのだろうか。例えば…

来むと言うも 来ぬ時あるを 来じと言うを 来むとは待たじ 来じと言うものを
これ、意味は「来ると言っているのに来ない時があるのだから、来ないと言っているものを来ると思って待つようなことはしません。だって来ないと言っているのですから」ですわな。で、これを現代奈良弁若者言葉にすると…

くんのかい？ こんのかい！ こんの？ くんの？ いや こんのかい！

どうでしょう、うかつにも笑ってしまいましたが、お願いですからこの本を読んだからといって、それで万葉集に触れたとは決して思わないでくださいね！他に二首。

うちだけやん 愛してんのは あんたは「好き」って いうてくるけど 口だけやん
イケメンの俺が 片想いなんかするかよ w って いったけど したわ www

もはや元歌が何なのか想像できませんね。ま、こんな本もあるということでした。

BGMは RC サクセッション のスローバラードでした…。